

### 1. FD シンポジウムの基本情報

平成 28 年度授業改善シンポジウムは 2016 年 10 月 27 日 14 時 30 分から 16 時 00 分に教育学部本館 2 階会議室にて開かれた。

本年度の FD シンポジウムは、愛媛大学が平成 27 年度に文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択されたことを受けて、地域を核として教育と研究をつなぐ取組について紹介している。

内容として佐藤栄作先生から「『坊ちゃん』のことなんて、何も知らなかった」、中野広輔先生、檜木暢子先生から「標準的な教育制度ではドロップアウトする危険性が高い児童生徒に対する学習支援の拠点形成プロジェクト」、福井一真先生から「『つくりたいものをつくり隊』キックオフ・プロジェクトの取組から」の 3 組から話題提供が行われた。司会は杉田浩崇先生が務めた。

### 2. FD シンポジウムの内容

佐藤栄作先生の話提供では愛媛県は 6 つのアクセントがあるのを聞き、驚いた。「地域ならではの研究テーマ・研究がわれわれを救ってくれる」「地域はわれわれが研究者で有り続けることを支援してくれると考える」との話がある。

まずは愛媛の方言アクセントの調査研究がまず果たすべき任務であり、方言アクセント調査が行われ、愛媛の方言といえば漱石の「坊っちゃん」という流れから、松山坊っちゃん会に入会し、顧問になった。

さらに研究として自筆原稿を知ることで、漱石以外の手による書き込みがあることを知り、「虚子に違いない」とのことで①字体の研究、②自筆原稿の研究 道草の書き潰し原稿の分析、③文学作品の中の方言、④作家漱石の誕生 虚子の書入れ→正岡子規・虚子との関係といった研究が行われた。

坊っちゃんからいくつかの研究テーマが生まれ、「足場・発射台（問題意識）と発射角度さえ定まれば、地域に向かって打てばかな

らず何かに当たる」とのお話がある。

そして研究テーマと教員養成の授業のつながりとして①字体の研究→漢字の構造→漢字の学習→漢字の正誤→漢字学習→初等国語他、②自筆原稿の研究→表記ルールの変化・変遷、③文学作品の方言→役割語としての方言→役割後の視点からの国語教材の読み直し→省察研究他と言った、いずれも学習指導要領の伝統的な言語文化と国語の特質に関わることが話され、今では坊っちゃん成立論にまでつながっていることが発表された。

中野広輔、檜木暢子先生からは愛媛県下の長期入院児に対する本学学生による訪問教育ボランティア事業が紹介され、この活動を通して寄せられた地域の教育支援のニーズとして、①長期入院時に対する学習・余暇支援の継続、②退院後復学期や通院時のキャッチアップ学習支援、③異才児教育が挙げられ、退院した後の長期入院のアフターフォローを大学の中でもチームとしてやってこられたことが話される。

福井一真先生のご発表では、昔と今で小刀をどう使用するかの意味が違っていることが話され、小学校学習指導要領では低学年中学年で使っているのにも関わらず、半数ほど使用しているが授業で使わせると使えてない現状が話され、教員も使った経験が少ないため、悪循環が話される。そんな中で道具を貸す支援体制を整えていこうといった活動が秋山先生と行われている活動が報告された。

### 3. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

筆者は専門の Solution-Focused Brief Therapy を活用した WOWW アプローチに研究を進めている（相模，2009,2011,2015a,2015b）。昨年度よりスクールカウンセラーの中で行なっている。児童や教員より大きな反響がある。従来より大学の教育相談の授業内でも行い、その効果について授業内で取り上げることにより教育と研究のつながりを築いている。